



愛郷無限

# 土屋館 どやだて 通信

発行者：大曲・花火通り商店街  
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035  
tuck-t@akita-tsujiya.jp

2014年03月07日号 NO.459

写真提供：大山市

## Subject：大曲納豆汁 次の世代への食文化の継承

2月21日（金）西仙北小学校の櫻田教諭から依頼を受け、西仙北小のスノーフェスティバルで大曲納豆汁を振る舞う機会をいただきました。

材料費だけをご負担いただいた提供でしたが、直前にインフルエンザによる学級閉鎖が発生したため、急遽スノーフェスは延期に。しかし大曲納豆汁の全校生徒への提供は予定通りおこなうことになったのです。結果として単に食べるだけではなく、生徒を体育館に集めて私たち旨め研による【食で学ぶ郷土愛】の講座を聴いた後、持参した昼食弁当と大曲納豆汁と一緒に食べる企画内容に格上げいただきました。

街を元気にするために、食という切り口で郷土愛啓蒙に努める私たちの活動を、校長先生を筆頭に先生達からご理解いただけたおかげです。（後で聞いた話によると、私たちの活動を理解せず、快く思わない先生も当初は何人かいたそうです。しかし、実際に私たちの講演内容を聴いて、子ども達への振るまいぶりを見てからは態度が一変、納得・感心してくれたいらしい）

体育館に集まった子供達を前に、糸引き納豆発祥地は秋田県の後三年付近であること、自家製納豆を作るのに失敗したとき納豆汁に流用されていたこと、納豆の栄養価は信じられないほど高く幅広いこと、人間は生まれてから死ぬまで納豆菌が作り出した葉（ビタミンK）のお世話になっていること、納豆汁は保存食文化と発酵食文化の融合した究極の栄養食であること等々を説明した上で、全校生徒400人に食べていただきました。

ただ食べてもらうのと、キッチンと説明をして、アレコレ知ってから食べてもらうのでは子供達の反応は全く異なります。子どもは素直なんですね～～（笑）

最初、体育館に入ってくる時には鼻をつまんで嫌がっていた生徒も、納豆汁が素晴らしいものだと聴かされると【食べなきゃ】という気持ちになってくれたようです。

後日、沢山の子供達からその時の感想文をお送りいただきました。このお手紙がどれも感涙ものでした。自宅で食べるより美味しかった子、食べれなかったけど挑戦した子、食べれなかったけど、こんなに良いものだからいつかは食べられるようになりたいと言ってくれた子。反応は様々ながら、地域の伝統食文化の一端を学んでもらえたと思います。家庭で納豆汁を作らなくなった現代、説明をせず、何も伝えず食べさせれば、納豆汁を食べられる子どもは半分くらいでしょうか。納豆汁の素晴らしさを伝えた上で食べさせれば、ちょっと頑張っても8～9割の子どもが食べてくれる感触を持ちました。

一方で食べられなかったの何割かの子供達も、世界に誇るべき郷土食だということは深く記憶に刻み込まれるでしょう。郷土の食こそが大切なんだと知ってくれる子が半分でも育ってくれば充分です。その子達は自身の子どものに伝えるでしょう。そうでなかった子ども達にも、またその次の世代で伝える努力をし続け、また半分に伝われば75%に増えるのですから。その次の代も続ければ87.5%です。いずれ時間がかかりますが徐々に焦らず、但し立ち止まらずに続けねばなりません。